

移動式の木造住宅を手がけるアーキビジョン21（北海道千歳市）が、ホテル事業に参入する。主に災害時の応急仮設住宅に使われるコンテナ型住宅を活用し、自社で運営する。千歳市と茨城県小美玉市で10日にオープン予定で、およそ5年で全国200カ所の展開を目指す。

コンテナ型ホテル運営



移動式住宅のアーキビジョン21

同社はムービングハウスの「スマートモデュール」を手がけている。1ユニットの床面積は30平方メートル。連結すれば広さを柔軟に変えられるほか、ユニットを重ねて使うこともできる。宿泊施設としても引き合いがあり、これまでJR北海道のグループ企業などが採用している。

アーキビジョン21が千歳市真々地にオープンするホテル＝同社提供

まず千歳と茨城・小美玉 5年で200カ所目指す

社運営するホテルは、道内では千歳市真々地にグランドオープンする予定。名称は「SMA・MO inn Chitose」で、JR千歳駅と新千歳空港からは車でとも10分ほどで到着する。現在はプレオープン期間で、宿泊者から寄せられた意見をもとに本格開業に向けた準備を進めている。

3号店以降の出店も計画中で、道内外10カ所以上の候補地を検討している。アーキビジョン21の丹野正則代表取締役は「今後5年ほどで道内40カ所、道外160カ所へ出店したい」としている。

スマートモデュールの主な用途は、災害時に使う応急仮設住宅だ。2018年の北海道胆振東部

ユニットを連結した2DKの客室を約60室用意した。4つのシングルベッドのほかトイレやシャワールーム、洗濯乾燥機を備える。駐車場から室内までバリアフリーとした。オープン時の宿泊料金は1部屋あたり1万5000円を想定している。

宿泊業の経験が豊富な社員も採用した。主にインバウンド（訪日外国人客）の長期滞在を想定するほか、最先端半導体の量産を目指すラピダス関連のビジネス客の利用も見込んでいる。

スマートモデュールは災害発生時に、ホテルから応急仮設住宅に転用できる。大量の仮設住宅を迅速に提供するには、平時から保有するユニット数を増やしておく必要がある。そこでホテルの全国展開を進めてスマートモデュールを増やし、災害時に備えることにした。

地震や20年7月に九州で発生した豪雨災害、24年1月の能登半島地震などで使用された。このほかラピダスの工場建設に携わる作業員宿舎としても使われている。

アーキビジョン21のスマートモデュールは、貸し出しを含めおよそ2400ユニットある。ただ丹野代表は「首都直下型地震や南海トラフ地震といった大災害が起きたときは、この規模では不足する」とみる。

スマートモデュールは災害発生時に、ホテルから応急仮設住宅に転用できる。大量の仮設住宅を迅速に提供するには、平時から保有するユニット数を増やしておく必要がある。そこでホテルの全国展開を進めてスマートモデュールを増やし、災害時に備えることにした。

出資。両社の出資比率は特別目的会社（SPC）を通じて75%となった。資金確保も進めている。北洋銀行と環境や社会課題解決につながる事業を対象とする「サステナビリティ・リンク・ローン（SLR）」をこのほど契約し50億円を調達。スマートモデュールは26年秋のアジア・アジアパシフィック大会の選手村にも採用され、事業拡大に備える。